

先日宇治拾遺物語に続いて、今昔物語の中でエロく魅惑的な話を発見。紹介します。

<巻 20-7>染殿の后（きさき）、天狗に惑乱させられること

今昔、染殿の后と申すは、文徳天皇の御母也。良房太政大臣と申しける関白の御娘也。

今は昔、染殿の后（藤原明子）と申し上げるお方は、文徳天皇の御母に当たり、関白太政大臣藤原良房公の御娘でいらっしやる。容姿の美しさは格別でおありになった。だが、この后はつねに物の怪にお悩みになっていたの、様々なご祈禱がおこなわれていた。靈験著しいと評判の僧を召し、修法を行ったがそのしるしが無い。

大和の国、葛木山（葛城ではないのだね）の頂上に金剛山があり、そこに、一人の尊い聖人が住んでいた。鉢や瓶を飛ばし、食物や水を持ってこさせる、このような修行の末にすばらしい験力を現し評判が高かった。天皇と後の父が「その僧を召して 病の祈禱をさせよう」参内するよとの仰せが下った。聖人は何度もご辞退申し上げたが、勅命にそむきがたくついに参上した。

御前に召して加持を奉仕させたところ、たちどころにしるしが現れ、後の侍女の一人がにわかに錯乱し泣きわめく。聖人がますます力をこめると、侍女の懐から一匹の老狐が飛び出した。後の病は一兩日中にお治りになった。父大臣は非常にお喜びになり、「聖人 しばらく伺候しているように」と仰せになったので仰せに従った。

ちょうど夏のことで、后は単衣のお召し物だけだった。風が吹き、御几帳の垂れ布がひるがえり、聖人は后のお姿をかいま見申し上げた。このようなすばらしく美しい人を見たことがなかったので、聖人はたちまち理性を失い、後に深い愛欲の情を生じた。思い悩み、胸の中は火を焼くごとく、ついに思慮分別を失い、前後の見境もなく、御帳の内に入り、後の御腰に抱きついた。（ことが なったのか ならなかったのか

この時はなかったのかな・・・）まわりのものに騒がれ、聖人は牢獄に入れられた。

聖人は、天を仰いで、泣く泣く誓いを立てた。「わしは ただちに死んで鬼となり この後の存命中に わしの願い通り 后を抱いてやる」聖人は絶食して十日余りで餓死した。するとたちまち鬼の姿になった。姿は裸で、頭は禿髪（かぶろ-おかっぱ）、身の丈八尺（2.4M）、肌は漆を塗ったように黒く、目は鏡（かなまり-鉄の椀）を入れたよう、口には剣の様な歯、牙もある。赤い褌を付け、腰に槌をさし、にわかに後の几帳のそばに立った。まわりのものは動転し、逃げ、気絶し、うずくまったが、后は身繕いなさって、笑みを浮かべ、鬼と二人でお臥せになった。

鬼が、「日々 本当に 貴女を恋しく つらい思いで過ごしておりました」といい、后は嬉しそうに声をあげられる。鬼は連日同じ姿で現れ、后もまた、ひたすら鬼が慕わしいものとお思いになるのであった。

天皇と父大臣は、鬼を降伏させるよう、多くの高僧たちに祈禱させた。鬼は三ヶ月ほど現れなかった。后がもとのようになられたのを、お聞きになられた天皇は、後の御殿に文武百官を引き連れ行幸なされた。天皇と后が涙ながらにしみじみとお話なさると、例の鬼がにわかに踊り出て、後の几帳の中に入った。天皇があきれて見ておられるうちに、后は例の御様子になって、いそいそと几帳の中にお入りになる。几帳の外に出た鬼と后は、多くの人の見ている前で、一緒にお臥せになり、いいようもなく見苦しいことを、はばかりことなく行いなさった。天皇はすべもなくただお嘆きになるばかりで帰っていかれた。

高貴な女性は絶対に、法師に近づくことを戒めるために、この話は語り伝えられた。

身の丈八尺のまっ黒の膚の鬼が赤褌でぬっと現れる。生きて願いが叶わなければ、命を絶って鬼になり、「おまえのそばに行きたい おまえが好きだ おまえを抱きたい」死んで鬼になっても、たぎりたぐらせた燃える気持ちの鬼。その気持ち、その体躯、その力に呼応する女、女もまた気持ちを昂ぶらせ恥も外聞も忘れ、衆人環視の中で鬼と女は睦あう。これは素晴らしい、オレにはできない胆力、気力、気概、迫力。

今昔物語はつまらない教訓的な話、仏教説話の話も多い中に、不思議な話、エロい話、鬼の話、芥川龍之介やその他の作家がネタに使った話が入り混じった物語の宝箱だ。まだまだ読みたいねえ、現代語での訳だけれど。

◎車を止め歩き出した。マイカーはホンダの20年以上もの、いただいたものだがまだまだエンジンは快適に回転。昨日から微妙な天気予報、「降るか降らないかはっきりしろ」とつぶやきたくなるような予報だったが、林道を歩き出すと、これまた微妙な雨ながら傘が欲しい。持参のビニール傘を広げた。ネットで、yahooの天気予報と、「てんきとくらす-高原・山」とふたつを見ている。山の予報では快適な山行ができる予報だったが・・・

◎林道を車で走っていると、「おいのしし」大きさは猫ぐらい、茶色けどウリ模様がない、模様のないウリボウもいるんだね、サルも見た、蛇も見た、鳥も何種かみた。今日の目的地は三峰山、オレは初めてだが、同道の久子さんは何度も来ているらしい。今日のルートは東吉野からトンネルを超え、三重県側ぐるり林道をまわってきた。この林道、舗装も整備もしっかりされているが、水をたっぷり含んだ法面、新しい落石、ごっそり路肩まで来ているがけ崩れ、事故が起こりませんよう祈るばかり、なれど山の崩壊、自然には逆らえないねえ。

◎クマノミズキ：赤いぶつぶつのとんがり帽子、そのうち黒い実ができる、動物が食う。白いものもあるようだ。

◎タラノ木：ひよろひよろの細いやつばかりだと思っていたが、こんなに大きくもなるものもあるのか。クリーム色のぶつぶつが放射状に広がる花なのか、これも見たことがあるぞ。みなさん、「旨い」とうるさく言う、てんぷらが旨いと、そうだね、珍味としては旨いが、さほど、絶対欲しいものではないと独り言、玉ねぎのてんぷらが好きだ。

◎林道をしばらく来ると登山口、2時間で頂上に着くとでている。歩きやすい登山道、まだ傘をさしている。

◎みつまた：漢字では三椏と書くようだ。葉はつつじ似で、大きく細長い。花はヤマブキ色（赤もある）の団子状らしい、紙を作る地味な木だと思ったが、花は艶やか派手やかなり。

◎カラマツ草：白い小さい花、これはどこかでよく見かけるねえ。白い無数のとげとげが放射状に。

◎ヤマジノホトトギス：「ほうこいつは白い我が家にあるホトトギスは紫色」あちこちに点在している、このホトトギスの花は白に白の斑点なのだ。

◎雨が止んだかなと思ったがまだ雨が降っている。予報では午後は晴れとなっていたが、「雨が降っていたねえ午前中はうそのように晴れたねえ」と笑っていえるといいが。

◎子供のころに、「ハゲ山」という言葉をよく耳にしたが、木が生えていない山、木が切り倒されて再生できていない山、いわゆる「ハゲ山」は最近目にしない、スギやヒノキを伐採し終わった山は別として、思い出せない。山に登るようになって、山と親しくなると、山歩きを楽しんでいるが、地面の草や、登山道の斜面には草がない。これはどうも、鹿めの仕業らしい、大きな木の表皮も、めくられ食われているが、これも鹿めの仕業らしい。

◎昭和30年（1950年代）ころから、里山の姿が変わってきたという。それまでは、それこそ、「はげ山」という言葉があるように、山のまわりに暮らす人々が、山の恵みを利用しつつしていた、それ以降半世紀が経って、ある種の産業革命、技術革命のおかげで、山の恵みがいらなくなった、ほかのものが出てきた、それ故に人々は山に入らなくなった、そのせいで、山の木が草が茂りだしてきた。

★有岡利幸著<里山>より：近世・江戸時代の里山は、現代人の想像を絶するほど植生は少なかった。それは、弥生時代の水田稲作農耕から、昭和30年（1955年）ぐらいまで続いた。昭和30年以降、元々樹木の繁茂に適した気候条件のわが国の山地は、その土地の気候に最も適した植生へと、自然に回復していくのである。

★里山の樹木は、製鉄、製塩、製陶、等の燃料使用もあったが、最大の利用者は水田稲作農業者だった。青草や芝や木灰は肥料に。立木は建築用材や、農耕用材に。雑木は自家用燃料や、炭にして商品に。あらゆる植生が里に近い山から運び出され、山の土壌に腐食の供給が断たれ、土地が痩せ、アカマツ林が進出した。アカマツは里人にとって極めて有用な樹木で、薪や炭、建築や土木用材、根株の樹脂が灯りに。近世の里山はアカマツが生育する山だった。

◎コブシ：でっかいコブシの木5月の連休にはこの山のコブシが満開になるという。ネット検索で、「おおこの花」「雪の上のテッシュだね」散った花びらを見て澤山さんとうなずきあったのを思い出す。

◎ホソバノヤマハハコ：この山には群生しているという。頂上直下の斜面にこの白い草花が、野球グラウンドぐらいの広さに咲き誇っている、「これは見事だ」「まてよ先日も八ヶ岳で見たのは珍しい野菊と思ったが違うかな」「細い葉が色の混じった緑色」

◎トリカブト：この山にも咲いている、いい紫色だ 好きだねえこの花、この紫、この緑の葉。花とともに葉が茶褐色に枯れるのはちとつらい、紫と緑が元気な方がいい。

◎アセビ馬酔木：うすい朱色の鈴ぶらぶらの花、これがアセビなのか。尾根では、咲くトリカブトに数字が記してある、「これはなんだろう 紫の花の所々に 毒草ゆえに？」「ミステリアスな話 まさか現代アート」なんだろう。

◎この辺り、三峰山頂上付近、なぜだか木がない、芝草が一面に広がり、一本二本低い木ががんばってポツリポツリ。冬には吹雪が躍り、雪に樹氷、強い風、ひん曲げられた木の幹、冬もよさそうな山だ、来たいねえ。

◎でかいブナや、ミズナラが現れだした。「立派だ 元気だ しかもぶっとい」「こっちのブナは下から歪んでいる しかも 足ぐらいの太さの つるが巻き付き 伸びている」「いやあ 大きな木は いいねえ」

◎2時間で尾根道に登ってきた。ふんわり、穏やかな尾根道、空はまだ白っぽい雨がやみ、止んだと思うと、感じないぐらいのポツリ雨、冷たい風が、汗でびっしょり濡れた半そでシャツをすりぬけ、心地がいい。

◎頂上 1235M と標識がある。「室生火山群」という表示板も、1500 万年前の火山の話だそう。もう一つは林道を車で走りながら、「中央構造線」と書いてある。中央構造線の露頭部分が大きく見えるらしい。この山は地学だ。

◎頂上を少し超えたところで昼飯。いつものように弁当を作って持ってきた。足がつかないようにと、ポカリ飲料も持ってきた。たぶん涼しいだろうけどと思案の末、1,5Lの水分、家に帰り着くころにはなくなっていた。

◎ツルアジサイ：こやつの名前が、こうだったのか、よく見るねえ、白い花を。

◎昼食を食べ、戻り始める。雨はすっかり止んでいるが晴れ予報通りではなく、相変わらず霧がでている。寒いので雨具の上を着ている。濡れた半そでシャツに、長そで雨具、これでちょうどいい。地面は濡れてはいないが湿っている、そのおかげで、ブナの幹の白い斑点がきれい、苔の緑がきれい。歩いていると木が無くなり広い斜面に芝生状態の広場、なんでここだけ木がないのか、不思議な場所ながら、不思議な美しさ、晴れなら展望がいいかもである。

◎「ザックが煙突だねえ」という。「煙突」とは上へと荷を積み上げ、ザックのてっぺんが担いでいる人の頭よりも上に出ている状態の事、荷が多いのでこうなるんだねえ。今日は、ビニール傘をザックに入れ歩いていたが、先ほどから何度も傘の柄が、木の枝にひっかかる、「えい もう」とぼやきながら歩いた、うまい具合に傘の柄が木の枝をつかんでいる、オレは動けない。大きく重い荷を背負って、倒木や垂れた枝の下を通るのはいやだねえ、背をかがめ通るもひっかかる、またひっかかる、動きがとれない、腹が立つ、体力が消耗する、このひっかかりはいやだねえ。

◎帰りは尾根道をまっすぐに行く、ここは人気の山だそうで、踏み固められた道は軽の四輪駆動なら通れそう。

◎ここから御嶽山が見えるという、ほんとかね。御嶽山、また行きたいねえ、まだ何人かが出ていないとか。

◎新道峠というところから下り始めた、もう午後、いよいよ樹々の中は薄暗い、空は白い、霧が濃い。下れば晴れの天気なのかもしれない、下から山を見上げると、中腹に雲がかかっている、「あのあたりは雨かねえ」なんて下の人と言う風景かもしれない。「おお これ カエデだ でっかいカエデの木 あの葉っぱ わかるよ カエデは」

◎車まで帰ってきた、5時間ぐらいの軽い山なれど、それなりに満足感。靴も、雨具も、カメラも、湿っている。雨具を脱ぎ、靴に靴下をぬぎ、乾いた靴下と運動靴。びっしょり濡れたシャツを脱ぎタオルで身体を拭いて、乾いたシャツ、生き返るねえ。コーヒーを飲んでビスケット、旨いねえ。大阪からここまでは遠い、3時間足らずかかってしまう、大阪に帰り着いたのはもう夜だった。

★有岡利幸著<里山>より：これからの里山を考えると、まだ方法は決まらず色々試されているのだが・・・。

◎日本のスギ、ヒノキは輸入の米マツ、米ツガとの競合に価格、大きさ等に負け、価値が下落。

◎炭、シイタケ、山菜等の作成や栽培が細々続く。

◎ボランティアの人たちにより里山の手入れが・・・。ナショナル・トラスト運動による里山の保全が・・・。

◎人々が森林を歩く時、雑木林を散策する時、その自然の中で快感感動が得られる。◎森林の水源涵養機能、森林は緑のダム。山に入ると岩の間から水が流れ、細い谷から水が流れている、その水の旨いこと。◎防災機能：山崩れ、洪水、雪崩等を森林が防ぎ、その害を軽減する。◎温暖化防止。植物は光合成により、大気中の炭酸ガスと酸素を交換する。大気浄化。野生動物の保護。野外教育。オレもいつまで山登りを楽しみたい。

水上勉著<良寛>「おお この本は 前にも 読んだ 前にも 借りていた」と思いながら好きな良寛さんの事、小説家が資料を調べて書かれたエッセイ、楽しく読んでいる。<蓑笠の人>という項がある、「あ これも読んだがもう一度」と読みながら楽しんでいる。「越後草民宝鑑」原作者はわからないが、ある人物を物語風書いている、ちょっと浪花節調、主人公を優しく書いている節はあるが、これまたよし。

☆水呑弥三郎は、生涯「蓑笠の人」なりき。宝暦8年(1758 良寛と同年)柿崎生まれ。(良寛は出雲崎 50K ぐらい離れている)長じて才知にすぐれしため、村肝いりの許しを得、寺院の上人に漢学を学び、12歳で出家を願い出るも法度故不許なり。農業漁業にいそしんでいた。天明3年~9年の大飢饉に遭遇せるより、農民の困窮きわまりなし。

★一揆総勢四百人、庄屋、酒屋などへ狼藉破壊、放火暴動のかぎりを尽くした。出雲崎代官所は与力をさし向け、暴徒の指導者を逮捕した。弥三郎は、金山水替え人足を20年間勤め、勤務優秀なりし為帰郷せし。数年後亡せり。

◎ここで水上先生、「なんと良寛という人は身勝手な・・・」とぼやいておられる、少し、あげてみます。

良寛の漢詩<東郷訳>出家してより 身は雲まかせ 樵夫と交わり 童と楽しむ 王侯そもなにかせん 神仙ねがわしからず 棲家いずこなりとも 奥山をよしともおもわず 日に日に心あらたに 生命のどかにおわらなむ

先生：いつ読んでも、良寛さまは雲上の境涯だと思う。暢気な世の中、越後は平和だったのかな、否、何年も飢饉が続く農民騒動が起きている。禅僧には托鉢乞食という生活方法があるが、百姓が飢饉のとき地獄を這いまわる目が、布施を受ける側にも跳ね返ってくる。どういう米をどういう顔で頂戴し、その恩をどのように返したか。

良寛の漢詩<東郷訳>さびしさは あばら家に身を 老いさらばえての 詫び住まい 真冬となれば 猶のこと つらしとも 苦しとも 粥すすって 寒夜をしのぎ 指折り数えて 春まつばかり 米はいよいよ 囊底に尽き ほかに芋なし 野菜なし 考えあぐむも 知恵もなし 君哀れめよ この詩見て

先生：冬の五合庵の寂寥(せきりょう)はわかるが、耕さないで米もない道理、老いさらばえてと聞けば同情も浮かぶが、調べると48歳のころ、鋤の持てない年でなし、怠け者の身勝手な嘆きではないだろうか。水呑弥三郎は上人に出家を願い出たが、「法度に依り不許」となっている。当時の水呑百姓は逃散はもとより、出家も許されなかった。名主の家柄である良寛は出家が許されたが、百姓は五人組の連判と代官所の許可が要った。猫の手も借りたい農家の出家など五人組が判を捺すはずもなかった。

★宝鑑で弥三郎が人足を勤めていたころ見た光景。涌井が引き回しに遭遇せり。髪を切られざんばらなり。髭ぼうぼう肉そげ落ちたる顔のこの世の人とも思えず、眼窩骸骨の如く窪みて、炯々たり。異形の相というべし。裸馬の背にくくりつけられ。手足縛られたる。町人引き戸をおろし寂として声なし。浜にて断罪に処せられしとぞ。

天明の義人として涌井は新潟市民に語り伝えられている。その事件後当時、良寛は出家した。曹洞宗、光照寺に入った。その後22歳の時、偶然光照寺にやってきた国仙和尚の後を追って玉島円通寺の庫裡の片隅に草履を脱いだ。

★良寛が玉島に向かったころの弥三郎：安永六年、弥三郎は母看護のため、人足仕事の新潟より帰郷を許され、故郷の柿崎で人足仕事をしたり。弟妹はまだ幼く農事のほかに副業もなさざるべからず。十八歳で庄太夫の仲介で妻を迎えたり。その後弟妹はそれぞれ仕事を、嫁に行き、弥三郎は親子三人で暮らした。水呑なるがゆえに持ち田はなく、労賃代わりに扶持米をもらい余暇に人足として港で働く日々が続いた。

★弥三郎が一揆に加担したるは詮無き理なり。首謀者「重佐衛門」「善三郎」は、富裕者、米屋、質屋、酒造者らに、買い占めたる米の放出を願い出ると、弥三郎の書をよくしたるにより首謀に加へぬ。弥三郎もその暮らし窮めて困窮なり。家族三人骨と皮に瘦せ、お上の施粥がなければ一家路頭に死骸をさらさん。仮に村離れなしても、諸所に流れ、凶作の声きこゆれば、いかでか安心の場所を得ん。憤るのは同町内に在って、土蔵に米、味噌を貯へ門を閉ざして世間の苦しみをみざる富裕者なり。このうちは奉行所に訴へ、かの土蔵の米を放出なさしめん。弥三郎は、心ならずも文書をよくなせる立場より首謀者に加はれるものなりき。

★神明の宮に集まって、螺貝を吹き、棒、竹槍、鳶口などを用意し、打ちこわしに向かう水呑百姓、町人ら千人の雄叫びは、狭い柿崎の街並みを轟かせ、庄屋、酒造家の家々から火の手が上がると、盗賊と化した暴民のせめぎあう景色はどのような地獄絵図であったか。出雲埼代官所の代官、与力、同心、捕手数十名を引き連れの鎮圧で首謀者はその日のうちに捕縛されている。翌日、「重佐衛門」「善三郎」「弥三郎」は鶉籠（とうまるかご）に入れられて出雲崎送り、重佐衛門は代官所で磔刑となり、あとの二人は佐渡送りとなった。

★佐渡金山は幕府の直轄地として支配されていた。この鉱山の水替え人足に、諸国の無宿者、罪人が使役された。「佐渡金銀山史話」によると、江戸より無宿者六十人目籠に入れ、出雲崎から佐州に着船す。十日ばかり休息なさしめ、それより隔日に敷内へ入れ水替え人足をなさしめる。古老の話だと何十という唐鶏籠（とうまる）が列をなして駆けゆくさまは、誠に見物であった。（今は唐丸籠と書くようだ。例えば吉田松陰は長州から江戸まで、入れられっぱなし。睡眠、食事、排便（下に穴が開いている）の時も出してもらえない。）やがて水替え人足小屋に着くと、小屋の親方が大鉦で、「えいっ」と気合もろとも籠のてっぺんを切り割った。その時はいかなる豪胆ものでも、顔を真っ青にしたものである。と史記に出ている。

★水替えとは、敷内最先端の穿子（ほりこ）の働くところに水が溜まっている。これを汲みだす人夫のことである。暗い坑道で朝から晩まで、水桶や釣り瓶を上げ下げする重労働。無宿人は陽の目を見ない労働のため、みるみる痩せ生氣をなくした。護送中から栄養失調が、かって知らぬ佐渡で、一日中洞穴の中に、一分間に二斗の水桶を運ぶので身体も弱り、病気になった。中でも、「よろけ」珪肺（粉塵を吸い込むことで）で悩まされた。

★幕府は水替えをまじめに勤めれば、平人に戻るという制度を設けた。十年まじめに勤めれば、という制度ながら、三余年で油煙の混じった痰を吐いて、よろけて死にたえると奉行は日誌に書いている。

★弥三郎は、二十年の就労を終え、平人となり、帰国を申し渡され、いわゆる御赦免船に乗った。仲間の大半がよろけて死んだ坑内激労を、どんな方法で生き延びたのか。出雲崎港に着いたのは、良寛も弥三郎も48歳になっていた。

◎水上先生：臨濟宗の関山師は、梧後、奥美濃の山中に送り、農家にもぐって一日中米、野菜を作り、炭を焼き農奴となった。大燈師は、梧後、五条橋下で過ごし、屍体ながめ、下層人の群れに二十年暮らした。良寛はそれらの先師と違い、語録も説かず、弟子も取らず、田もつくらず、衣もおらず、炭も焼かず、小屋に寝そべり、童と遊び自らを「大愚」と言った。

★「草民宝鑑」弥三郎赦免となり赦免船にて出雲崎港に着いた。柿崎村に帰国せしが、家屋は破れ果て、廃屋なりき。村人來たりてその風貌の変わり果てたるよろけ顔なるに驚き、弥三郎とは気付かざりしも、時たつて漸く素性わかりしかば、人々集まり來たりて云う。重左工門は磔刑に、善三郎は死亡せりと。他の一揆仲間は八丈送りとなりたるも、与兵衛一人帰国後百姓せしが、一年半にて病没せり。さらに汝の弟妹も餓死せり。されば我が妻子はいずこにゆきしや。母は世話する人ありて牛が鼻に嫁しぬ。子はいずこに行きしか知らず。弥三郎、瞬時、色なくして佇みありしが、ややありてありがたきことなり。佐渡にても、水替えを勤めしが、心にかかるは妻子のことなり。故里もまた凶作続き、妻子らは路頭に迷わん。妻には謝りても謝り足らざる気持ちなりき。他家に入りて幸せなれば、これまた親様の慈愛なり。二十年の歳月は流罪人の生家を朽ち果てせしめ、村人もまた、流罪人を泊めおくことを心喜ばざりき。一揆以来お上のとがめだては厳しく、集まりは取り締まられ、夜回りの監視に脅える日頃なり。汝の世話すれば、あとの祟りもあることなれば、早々に立ち去られたし。弥三郎はよろけ足を引きずりて、折からの小雨降り来れば、村人のくれたる、蓑笠をつけいづくかえ消えしといへり。弥三郎はその後柿崎を出て、妻が嫁した牛が鼻を訪れ、元妻女、「カネ」の姿を見ている。弥三郎とおぼしき者は、昼は乞食、作男、夜は経文などを読んでいた。何年か経ち、柿崎に表れた時は、六十がらみの両目患いたる乞食なり。弥三郎は墓地の木に寄りかかり死んでいた。

野口武彦著<今昔物語いまむかし>この本は、今昔物語の話一話づつを解説するのではなく、テーマを決めて、「ここここに この話が出てくる 今昔物語以外の本の中にも このテーマがある」という具合に、素人のオレでもわかるように説いてくれている。

汚物の私学：源氏物語の「桐壺」の中に、低い身分の更衣が帝の寵愛を受けたばかりに多数の朋輩からそねまれ・更衣は毎晩のように帝のしんじょに迎えられる。その時殿舎を結ぶあちこちに、「あやしき業をしつつ 御送り迎への人の 衣の裾耐えがたう まさなきことどもあり」という仕打ちをされる。江戸時代の注釈書では、「汚らわしきものまきちらして」とでている。通路に糞便をまき散らし、衣の裾に着く、長く伸ばした髪の方に着く、惨憺たるさまが想像される。

平安貴族の館には現代のようなトイレがなかった。江戸時代の「安斎随筆」によれば、古は雪隠というところなし。家の中に糞ひり所を一間つくり手おけるを樋殿といひ、・・」糞ひり所とは、屏風で仕切った程度の建物の一角そこに大使用の「大壺」小便器は「樋筥ひばこ」があった。高貴な女性は、樋殿に出かけることはせず、几帳の陰で樋筥に用を足し、「樋洗童ひすましわらわ」に片づけさせていた。当時の侍とは、「小冠者」とも呼ばれ、「侍は、湯殿、樋殿、お清め、以上三事は必ず勤仕す」ということらしい。

世の中には、ケタイなことを調べておられる方が結構多くおられるらしい。安田政彦著<平安京のニオイ>香りの文化を芸術まで高めた平安貴族の世界が、不快な臭いの環境の中で、心地よい匂いに囲まれて生活していた。アラン・コンバル著<においの歴史>ではパリのセーヌ川臭覚マップがある。においには匂・臭・香・薫の微妙なニュアンスで使い分けられる。においによる身分格差もある。源氏物語には悪臭はないし、今昔物語ではなんでもありである。古代の京都は、路傍排泄が普通の、「糞尿都市」であり、遺棄死体が山積みする、「死臭都市」だった。

今昔物語：十九卷十八話<三条大皇太后（こうたいごう）の出家したまふ事>

太政大臣藤原頼忠の娘で、円融天皇の皇后の、藤原遵子（じゅんし）が老齢になって出家しようとした。名僧の誉れ高い増賀聖人の手で髪削ぎをしてもらいたいと、山に籠る聖人をお召しになった。「わざわざこのわしを召されたのはなぜかのう わしのむさい一物がでかいと聞かれたか だが今はふにゃふにゃじゃ」あたりはばからぬ雑言に迎いはヒヤヒヤ。髪削ぎ落し簾からでて、「ああ 腹具合が悪い がまんできん」聖人は縁先にしゃがみ込み尻を出して下痢便をひり散らす。皇太后の得度式と言えれば国家行事に近い荘重な儀式の中の珍事。（痢るヒル この言葉、山口県出身の親父が、「糞をひる 屁をひる」というのを聞き、方便かなと思っていたが、どうも古語のようである）

今昔物語：二十八卷五話<越前の守為盛 六衛府の官人を付くる語>付は誤りで、忬る（はかる）ではという説。六月の暑い日、米を納入をさぼる、越前の守為盛の邸宅門前へ、警備の役所、六衛府の官人が、平張り（テントのような）に床几をずらりと並べ、出入りできないようにした。中から「皆様お暑い中ご苦労様 一杯差し上げたい」酸い酒にアサガオの種（下剤）塩辛いあてをどどんふるまった。主人の越前の守為盛、「越前国は早魃で不作 ある限りは貢納いたしましたが、窮状をお察し下され」と泣く泣く訴えた。そのうちに役人たちの腹がゴロゴロ言い出し、「長押を降りながらびちびちと垂れ懸けたり、車宿に行つて着物を脱がないうちから痢り懸けたり・・」おかげで滞納問題はうやむやになった。

創造主は、どんな思し召しがあつて排泄と生殖をかくも近づけ給うたのだろうか。人体の部位が接近しているのに比例して糞尿譚と艶笑譚は紙一重の間柄にある。

先生、この言葉は名言なり、昔の便所の落書きをかくも格調高く語られるとは・・。

11月に展覧会がある、「茨木市立川端文学館ギャラリー」で展覧会をする。白い壁、石張りの床、重厚でしかも爽やかな雰囲気、オレの絵を飾るにはいい画廊、オレの絵が映える画廊だと喜んでいる。川端康成を記念した文学館の付属ギャラリーだ。この文学館では、たくさんの展示物、いろいろな企画をやっておられる。

茨木市は、隣の高槻市と比較してみると、民間の画廊が十軒位残っている、「高槻の画廊で展覧会をします」という話が聞かれる。5月のJAZZの祭典、「高槻で演奏したよ」とラジオで飛び交う話、高槻のJAZZは全国的に有名だ。

台風の話：相変わらず今日も安威川河川敷に来ている。水のそばの背に高い草が無くなっている、ススキとか葦とかの類だと思うが、無くなって水の流れが見える。昨日までは草が生い茂り視界が遮られそこだけの世界、目の前だけの景色を見ていたが、突然視界が開け向こうが見えるという不思議な現象である。これが不思議と思うからいけない、草が生い茂っていたが何かの力か、きっかけか、草が無くなった。草は生い茂れば大きな遮蔽物だけれども押しつぶしてしまえば草はちっちゃい“もの”だという、わかりきった不思議な現象。これは先日の台風一過で川が増水、今歩いている河川敷より背の高さくらいの水嵩、水が勢いよく流れた跡がある、色が変わっている、ごみがひっかかっている。増水した急流が生い茂る草をなぎ倒し、一夜明ければ視界は冬のようにになっている、向こうが見通せるというわけだ。

先日の台風が来た日に登山の計画があった。衣川さんの発案で、滋賀県の湖西の山に登ってその帰り河原でキャンプをして一晩寝よう、一杯飲もう、という計画だった。四五日前からどうも雲行きが怪しくなってきた、台風がまともに関西にやってきそうだ、「中止の決定はもう少し 予定日が 近づいてからですが 台風が来そうですね」というメールが来て、二日前にやはり中止と決まった。その折のメールに、子ども時代の台風接近の話があった。「台風が近づいているというニュースが流れると 親父が 窓に板を打ちつけ 屋根に上って 瓦を養生していた 子供ながらに 親父の姿が 恰好がいいと思った」と述懐。本当の大被害の出る暴風雨では困るけれど、「ちょいこわの暴風雨は なんだか ワクワクする」とも書いてあった。それに応えて、尾道育ちの福田さんが、「子ども時代は災害に対して 隣近所が結束して助け合い あれを これを と言い合い 力を出し合ったものだけれど 今はそういう隣近所 むらなか まちなか の助け合い を聞かないね」とおっしゃる。

最近は、「大型の台風が 関西直撃」とか「非常に強い台風が 大きな被害をもたらします 自身で身を守ってください」というような言葉がニュースで流れる。この何年か、台風が来るとわかれば、雨戸を閉め、家の周りの風で飛ばされそうなものを片付け、「ただいま 台風の中心が 関西の近辺に 上陸した」と語るアナウンサーの声を聞きながら、「雨も風も ないねえ」とぐっすり眠る。何もない状態で朝を迎え、ガラガラ雨戸をあける、子ども時代以来台風は大阪に来なくなった。とはいえ、周辺の山間部では、風による家屋農作物の被害、崖崩れ、街の浸水、話は次々と出ている。ひと月ふた月経って、そんな付近の山に登ると、その爪痕が残っている。

絵の話：いうのも恥ずかしい、おこがましいが、「好調である どんどん描ける」という昨今。六十歳代前半は、「なんとか なんとか」と描いていたが、なかなか自分が見いだせなかった。六十歳代後半は、「こんなものでいかが ひよっとしたら オレの絵が できたのでは」とおそろおそろ描いていた。今振り返ってそんな絵を見ると、「ふふふ 一生懸命 描いていたねえ」とわらっている。今は若いころに言われたことを守って、「描きこまない すぐに筆をおく 最初の一回目 二回目がいいんだよ」を実行している、というより、初めの段階で筆をおくことを、オレ自身が許せるようになった。「もう 人のいうことは 聞かまい」と決めている。この夏、7月8月は小さい絵だけれど、毎日のようにサインをした、日付の続いたサインが並んだ。「9月になったら 大きな作品に かかろう」と決めていた、11月の展覧会向けに。この文学館ギャラリーは、「見せたい 飾りたい」というギャラリー、小さい絵や、売するための絵は似合わない。なので今は、30号・50号・50号の3枚セット、というやつを進めている。

◎甲斐駒ヶ岳には去年の7月にも登った。去年は3泊、初日に仙丈岳、二日目に甲斐駒ヶ岳に登っている。テント泊で行きたいというわがままプラン、体力がない今は、重い荷を背負って歩くのは、2時間が限度なので、その時間でベースキャンプにできる場所、しかも魅力的な山がある場所と考え巡らせている。

◎仙流荘から北沢峠に行くバスに乗っている。バスはマイクロバスよりちょっと大きいぐらいのもの、25名ぐらいが乗れる。ザック代が別途とられるがザックは膝の上に乘せなければならない、「とほほ 荷が かい」「大きな ザックだねえ」「酒を たっぷり 持たされまして」と冗談を。シラフにテント、テント用敷物にコンロとボンベ、コップエルに防寒具、パッキングが終わるところなのですよ。

◎このバスに乗るといつも思い出すのが、戸台から北沢峠まで歩いたこと。何度歩いたかねえ、澤山さんの車を止め、登山の用意をして、川に沿って歩いた。「雪の千丈岳」の頂上に立ったのを覚えている、「甲斐駒ヶ岳」に行ったのを覚えている、怖い思いをし、屋根のない「六合石室」雪の上でテントを張って寝たのを覚えている、「夜叉神峠」までも歩いたね。

◎このバスは、乗っている1時間、運転手氏がバスガイドをしてくれるが、今回は話が少なかった。ところが粋なはからい、「みなさん ここで終点ですが 長衛小屋と そのテント場に 行く人は そのまま乗っていていいよ 内緒ですよ」と歩けば10分の所、バスの回転場所で降ろしてくれた、という、ちょっとしたホロリ話。

◎南アルプスのテント場はまだ500円らしい。テントを二つ持って行った。いつものように大量の野菜に豚肉の鍋、運動量が少ない一日目だったのでビールはいつものようにグビりと飲めないが、そのぶん焼酎をホースからどんどん流れているおいしい水で割り、レモンスライスを入れていただいた。

◎食事の前にちょっと散歩。両俣小屋方面に1時間ほど歩いたが、フジアザミの花に感動。根は食用にも。歩きながら振り返ると、甲斐駒がきれいに見える、これまた感動的な美しさだが、へたくそ故、写真では写せない。

◎夜は、酔いも手伝って眠ったが、朝方、「寒い ダウンを着るのだった」と反省、帰った今、多少ぐずぐずなり。風邪ひきの話だが、去年から、「ちょっとでも ぐずぐずきたら すぐ薬」を実行、すぐに治りますよう。

◎二日目の朝、昨夜の鍋の残りにアルファ米を入れたおじやで腹がいっぱい。最近、夜眠れないと翌日の行動が辛い、こたえる、というので睡眠誘導剤のお世話になっている、おかげで快調である。「さあ 甲斐駒ヶ岳に登るぞ」と7時に出発。去年と同じく北沢峠→双児山→駒津峰→山頂→駒津峰→仙水峠→テント場、という行程を組んでいる。一本目を半分ほど登ってきた。この樹々はシラビソだったかな、昨日のバスの運転手氏、「シラカバがあり 上の方に ダテカンバがあります」といっていたが、ダテカンバもちらほら、針葉樹林の中は暗く天候を思いやられるが、向こうの方が明るくなってきた、予報通り今日は快晴かな。

◎休憩をとってパンを一個食った。二本目を歩き出してしばらくすると森が途切れた場所から視界が開ける、空に山に街、まる見えはいい、森の中、暗がり歩いていると一瞬だが視界が開けるのは心地いい。

◎まだまだ樹林帯、南アルプスは北に比べ上の方まで木がある。でかい木が現れだした、直径が1M以上もありそうな立派な木が所々、そのまわりに電信柱ぐらいの木がぎっしり、植林かな、違うかな。北八ヶ岳のシラビソ小屋付近には戦前のトロッコ線路跡、燃料用材木を運んだとか。

◎きつい登りだ、二児の手前にまたもや開けた場所、仙丈岳まる見え、伊那市街まる見え。

◎二児山に登ってきた。「2643M長谷村：四合目」と書いてある。昔の修験者もこの道を登ってきたのだ。二十年前によく来ていたころは、「つらい きつい」とは思わなかった、オレも元気だったんだねえ。

◎三本目を歩いている、樹林帯を抜け、背丈ぐらいのハイマツが多くなりだした。まわりはそれこそ、まる見え、白い甲斐駒がゴツゴツ見える、道が見える、人は見えない、所々が紅葉だ。去年の同じ時期、立山に行ったが、紅葉は素晴らしかった。ここも全山紅葉がまもなくか、それとも樹々の紅葉が少ない石の山なのかな。

◎9時過ぎ、ちょっと下って登り返す、全山まる見え、真っ青な空に白い雲というのか霧というのかがかかっていた、あの白い雲が取れてくれたらいいが、あれが空を覆うようになればいいだねえ。人が降りてくる、こんな早い時間に、降りてくる人はよほど早朝に出発した人か、山梨のほうから来た人か、聞かなかったがどっちでしょうね。

◎10時に駒津峰にやってきた。「2750M 駒ヶ岳六合目」の標識。山ガールがいる。「もう登ってきました 朝 4時に小屋を出て 登った」「おお すごい こちらは 7時出発です」ここは見える見える、まわりが全部見えるが、駒のほうに雲がかかりだしてきた。ここでカップヌードルを食うことに、もうあと1分ぐらいで食べごろだ。

◎さあここからは岩稜帯、「いやだねえ こわいねえ」三点確保でそりり上り下り。高所恐怖症の山登り好きには、岩稜帯の岩場は精神的にこたえる、体力も消耗するね。「もう 高い山は これが最後かな」なんて弱気に思っていると、上から八十歳より少し若いぐらいの爺様紳士がおっちら降りてこられた。「もうこれが最後なんて きみい十年早いよ」なんて言われそう、怖さを楽しもう。

◎11時、四時間でてっぺんにやってきた、「お もうすぐだ」と歩いていると祠が目についた。先日の赤岳は2時間に比べこちらは4時間、しかも怖さが加算、「おおしんど」であが、「なんとすばらしい なんと美しい なんと気持ちがいい」である。ここは全部が花崗岩、白っぽい石膚、崩れた砂はずるずる滑る、山の恰好は異形だ。祠に小判がぶら下がるように、わらじが並んでいる、修験道の祠だね。オレもかって赤河原分岐だったか、怖い怖いとやっと登った。「ここまでこれた 助かった」と雪に埋もれた祠にぬかずいた。

◎地面に石ころの鋏を打ったようにボタンが連なり、ずっと先の大きな岩の帯に吸い付いている、こんな帯が何本も並行にある。登山道の目印に埋めたのかと思ってしまうほど人工的だ。もう一つ、大きな岩の壁に草が斜めの帯になっている、帯が上にも下にも何層もある。大きな石の壁、帯状に土となり、その土に植物の種が着床、しょぼしょぼ草が帯状に走っている。不思議な情景、地学のいたずらなり。

◎11時過ぎなのに雲がわきだし、やや暗くなってきた。白い石の山、白い雲、へたくそ写真は上手く写るかねえ。

◎1時前に駒津峰付近に帰ってきた、相変わらず岩ゴロゴロ、気を引き締めて上へ下へ三点確保なり。

◎またまた1時間で仙水峠に降りてきた。登るときは、「しんどい つらい」の急登、下りも岩ゴロゴロ、気が抜けない。昔、ここを通過して「夜叉神峠」まで縦走したのかな、それとも栗沢山から行ったのかな、断片でしか思い出せないが元気いっぱい四十歳代だった。鳳凰三山を歩いた。今この標識のあさよ峰→広河原峠→白鳳峠→薬師岳→最後に山下さんと会って小屋に泊まった。四五泊したように思うが、どこかの小屋、ボンカレーに汚い寝袋、「これで金を とるのか よお」と楽しい思いで。

◎3時にテント場に帰り着いた。まずは乾杯、ビール、漬け物、キュウリ、トマト、食いは贅沢である。焼酎を三杯飲んだが寝るには早いと北沢峠付近を散策。戸台からの、「歩いて やっと着いた 道」も健在だ。

◎三日目の朝は、コーヒー、ポタージュスープ、パンが色々。テントをたたみパッキング。相変わらずのでかい荷だ。10時発のバス。バスはマイクロバスより少し大きい、横に3席で補助いすもある。運転手氏、荷の数を数え、「いけるな」とうなずいている。もう一台でるなら荷が置けるが、と心配しながら乗り込んだが、まったくの満員、でかい荷を膝の上に乗せるとガラス窓に左の頭がくっつき身動きもできない。「右のほうに のこぎりの 風穴が見えるでしょう」とおぬかしあるが首を曲げることもできない。「あ サルがいますよ」「ええい 知るもんか」の左の斜面をずっと見ていた。おかげでたくさんの花が見られた、白、白っぽい紫、紫、黄、まもなく冬が訪れる山の斜面、いろいろな花が咲いていると楽しんだ。

◎11時過ぎ仙流荘で風呂500円也。風呂は人がまばら、三日分の垢を落としゆっくり露天風呂に入って景色を見ていた。「温泉が最高」とはいまだに言わないが、ぬるい湯、身体をほぐすにはちょうどいい、今回はハードだと思うわりには筋肉痛がない、ヒザにも来ていない。

◎30年前、阪口さんに初めて北アルプスに連れてきてもらった時の帰途、5月の白馬大池から小蓮華に登ったのかな、大糸線：穂高辺りから糸魚川まわりで帰った。車窓から北アルプスの雪景色を見ながら阪口さんは目を輝かせ、「岡村さん きれいですねえ あれがあれ こっちがあれ」と説明しながら、「ああ またすぐに あの山に登りたい そう思いませんか」と目を細めていた。「あんな しんどいのは もう いやだなあ」と思いながらも、「またすぐ あそこに 戻りたくない」と思いながら、「そうですねえ よかったですねえ」と答えていた。なのに、山から降りてきた今、「また すぐにでも 行きたいねえ 登りたいねえ」と思っているオレを発見。